

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 26 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22401044

研究課題名（和文） 資源・環境の利用からみるマヤ文明の動態—カンペチェ州南部の先史学研究

研究課題名（英文） Investigation of the dynamism of the Maya civilization according to their utilization of natural resources and environment in the southern part of Campeche.

研究代表者

横山 玲子（YOKOYAMA REIKO）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：50287041

研究成果の概要（和文）：本調査研究は、カンペチェ州南部地域を中心に、古代マヤ文明の発展と衰退のメカニズムを、文明と環境の相互作用から考察するための最初の調査である。古典期マヤ社会は、優越センターが複数の従属センターを支配する統合形態をもつとされるが、調査遺跡として特定したラモナル遺跡周辺の遺跡分布調査からは、古典期終末期に優越センターの支配とは異なった独立した諸集団の活動があったことが予見された。その要因として、当該地域の自然環境と、当時起こったと思われる気候変動（大干ばつ）が考えられるため、今後、さらなる調査を実施する必要がある。

研究成果の概要（英文）：In focusing on the interaction of human activity and the environment of the ancient Maya Civilization, we started our investigation at the southern part of Campeche to consider a mechanism of development and decline of civilization. The distribution of archaeological sites of the southern part of Campeche, especially in the surrounding area of “Ramonal”, indicates that there were many small scale centers being independent of superior-centers, as Calakmul and Rio Bec etc., in Terminal Classic Period (AD.800-1000). Our tentative view is that it will be closely connected with the environment of this area and some fluctuation of climate at the time, and it is necessary to continue our investigation in this area to understand a mechanism of the interaction of human activity and the environment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2011年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2012年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：文明学

科研費の分科・細目：人文学、文化人類学・民俗学

キーワード：マヤ文明・カンペチェ・新大陸先史学・資源環境利用・文明のメカニズム・建築様式・居住形態

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 文明と環境の相互作用から、文明の発展・衰退のメカニズムを考察する：

マヤ文明は、現在のメキシコ東部、ベリーズ、グアテマラ、ホンジュラス一帯に栄えた文明であり、グアテマラ北部からメキシコのカンペチェ州に広がる中部低地では、早くから高文明の形成に向かう社会発展が起こった。従来、この地域ではティカル遺跡やワシヤクトゥン遺跡などが、メキシコ中央高原からの影響を受けて発展し始めたと考えられてきたが、近年では地域内での相互関係が社会発展の大きな要因になっていたとする見解も見られるようになった。とは言え、碑文解読や遺構・土器分析に基づく議論が多いなか、W. ラスジェは、中部低地にみられる自然環境に注目し、生活に必要な石材や塩などがなく、これら天然資源を高地や沿岸部から入手するために、その交換財として知識や技術を開発したことが、社会発展を引き起こしたと考え、同時に、天然資源と知識・技術との交換には限界があり、文明の衰退（古典期マヤの崩壊）要因ともなっていると指摘した（Rathje, 1973）。この説は、資源獲得の問題だけが社会発展をもたらすわけではないという批判を受け、彼の説は退けられたが、このような批判は軽率であると言わざるを得ない。ラスジェが主張したのは、環境利用という視点から文明の発展と衰退を考えた場合のモデルであって、その他の文化的社会的状況や要件を考えずにすべてが説明できるということを主張したのではない。本調査研究は、このような、文明と環境の相互作用という視点に立脚し、中部低地マヤにおける文明の発展・衰退のメカニズムの一端を解くことを試みるものである。

(2) カンペチェ州南部地域における詳細な遺跡分布調査及び住居址を含む小規模遺跡における集中的な発掘調査の欠如：

カンペチェ州南部地域に限らず、マヤ文明に関する考古学的調査は、もっぱら大規模な遺跡とその周辺に集中しており、特に当該地域では、小規模な遺跡および住居址における発掘調査は、ほとんど行われてこなかった。小規模遺跡とその周辺の遺跡分布調査は、マヤの社会構造の細部を見通すためには不可欠である。このような状況の中で、メキシコ文化庁カンペチェ支所の研究者らと協議した結果、カンペチェ州南部地域における詳細な踏査、測量、発掘等を実施し、当該地域の自然環境と併せて、先古典期から古典期におけるマヤ文明の動態について調査を行う必要があると考え、現地研究者の協力のもと、本調査を開始することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究では、カンペチェ州南部地域における自然環境及び遺跡分布調査、測量、発掘等を実施し、以下の点を明らかにすることを目的とした。(1) 住居址を含む小規模な遺跡の集中的な発掘調査を行い、日常生活の諸相を含めた文明の形成発展史を、広い時間・空間的枠組みの中で明らかにする。(2) 現時点でまだ不明確なカンペチェ州南部地域における環境利用と居住状況を明らかにする。これらの調査研究を通して、最終的にはカンペチェ州南部地域における文明と環境の相互作用に関するモデルを構築したい。

## 3. 研究の方法

(1) 2010年度及び2011年度は、カンペチェ州一帯、カンペチェ州南部地域、ユカタン州、キンタナ・ロー州における踏査を実施し、併せて、特に南部地域に関する先行研究結果を詳細に分析し、今後、南部地域における長期的な調査をどのように進めて行くべきかという視点にたつて、現地研究者とともに、見通しを立てる作業を行った。踏査地域は、①カンペチェ・シティー近郊（カンキ遺跡、ハイナ島、タバスケーニョ遺跡、ホチョブ遺跡ほか）、②南部地域のコンフス付近にあるバラムク遺跡、③南部地域のシュピル、ペインテ・デ・ノビエンブレ、プエブロ・デ・モレリア、エミリアノ・サパタの4つの村を中心とした地域、④北部地域のウシュマル遺跡、チチェン・イツァー遺跡、エク・バラム遺跡ほかである。これらの踏査は、主に遺跡分布状況と自然環境の観察、建築様式の多様性に主眼を置いて実施した。

(2) 2012年度は、カンペチェ州南部地域ペインテ・デ・ノビエンブレ村近郊に位置するラモナル遺跡について、集中的な遺構分布調査およびラモナルA建築群の簡便な測量を実施した。

## 4. 研究成果

本研究課題の主な成果は以下の通りである。

(1) カンペチェ州南部地域における遺跡および建築様式の分布調査

①シュピル村周辺では、トロンパ・デ・プロ遺跡およびパヤン遺跡を踏査し、これらが、ひとつの遺跡の中にある程度の間隔を置いて建設されたふたつの大規模な神殿基壇複合ではないかと推測された。その他、シュピル遺跡、ベカン遺跡、チカンナ遺跡、オルミゲーロ遺跡を踏査し、建築の特徴を観察した。いずれもリオ・ベック様式の遺跡として知られるが、チカンナ遺跡およびオルミゲーロ遺跡においては、チェネス様式の特徴である、巨大な口を模した入口を伴う遺構がみられ、建築様式が混在していることを確認した。

②ペインテ・デ・ノビエンブレ村周辺には、いくつもの遺跡が集中しており、リオ・ベック遺跡への入り口ともなることから、村から約 500mの範囲内に分布している、オコルウィッツ遺跡、ラモナル遺跡、パシオン・デ・クリスト遺跡を踏査した。また、村から直線距離で 1km 以上南西にある、リオ・ベック遺跡、その途中に位置するセイバ・リコ遺跡を踏査した。村からリオ・ベック遺跡へ至るルート上には、森林の中にいくつもの遺構が残されていると思われる。この地域の建築は、主にリオ・ベック遺跡に見られる建築様式と考えられる。

③プエブロ・デ・モレリア村周辺では、マノス・ロハス遺跡、エミリアノ・サパタ村周辺ではナフペチ遺跡を踏査した。いずれも小規模な遺構群である。

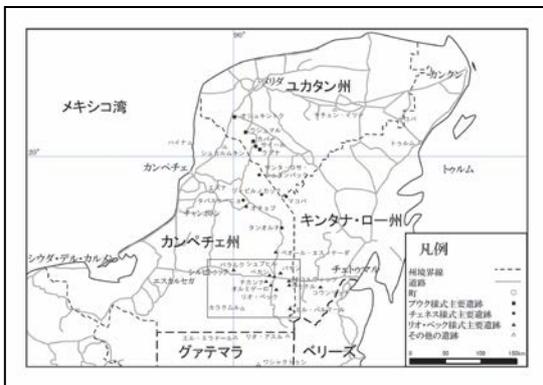


図 1 調査関連地域遺跡分布図（建築様式の分布を含む）

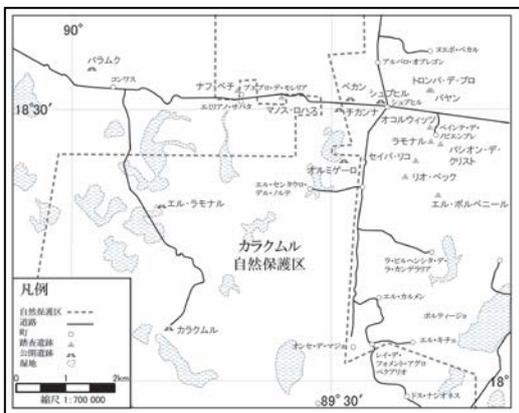


図 2 南部地域における踏査遺跡分布図

これらの踏査によって、まず、カンペチェ州南東部および南部地域には熱帯森林帯の広がりが見られるが、国道 186 号線付近から北西に向けて、その環境はサバンナ気候へと変化し、有機土層も薄くなることを確認した。また、カンペチェ州では、北から南へと、プウク、チェネス、リオ・ベックの 3 つの建築様式が見られるが、国道 186 号線付近に位置するチカンナ遺跡およびオルミゲロ遺跡

において、南部地域に広がるリオ・ベック様式の建築と、中部地域に広がるチェネス様式の双方が同一遺跡内に確認された。さらに、リオ・ベック様式の特徴であるタワー形建造物には装飾的な階段状デザインが見られるが、その内部にはもうひとつ、タワー上部へ通じる別の階段が設えられていることを確認し、カンペチェ州中部地域に位置するタバスケーニョ遺跡やホチョブ遺跡に見られるチェネス様式のタワー形建造物には、このような二重構造は見られない。恐らく、建築様式が南部から中部へと伝播し、様式の伝播は単なる模倣として興ったというより、中部地域独特の建築様式の中に、タワー形建造物そのものがもつ意味を伴って取り入れられ、リオ・ベック地域とは異なった、中部地域の価値観の中で様式的な変化を起こしたのだと考えられる。南部地域から中部地域に向けて、建築様式を含む文化の伝播が興ったとすれば、何を目的とした活動の結果であったのか、また、どのようなルートを通して伝えられたのかを考えなくてはならない。カンペチェ州南西の内陸部は、季節的に小規模な湖をいくつも生じさせるような湿地帯であり、恒常的なセンターを建設し得るような環境にないであろうと考えれば、このルートは、中央部および東部にあった可能性が高い。南部地域の集団と中部地域の集団との間にあった社会的相互関係の中心的な働きを担ったのが、現在のシュプヒル村を中心とする地域であった可能性がある。

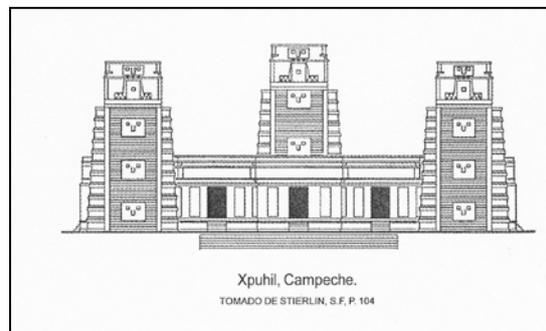


図 3 リオ・ベック様式（*Arqueologia Mexicana* 44 より）

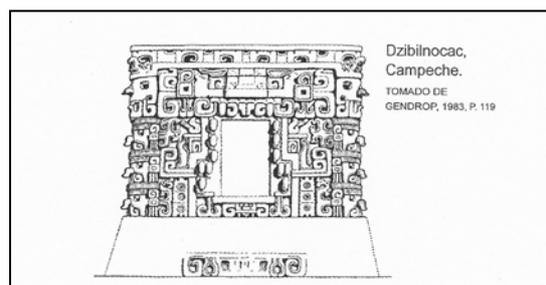


図 4 チェネス様式（*Arqueologia Mexicana* 44 より）

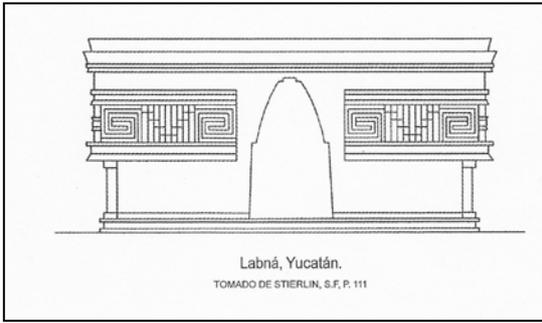


図5 プウク様式 (Arqueologia Mexicana 44より)

(2) ユカタン半島北部における建築様式分布調査

2011年度に行った、カンペチェ州、キンタナ・ロー州、ユカタン州の諸遺跡における踏査では、マヤ文明初期にペテン地域(カンペチェ州南部からグアテマラ北部)一帯にみられたペテン様式の建造物が点在していること、リオ・ベック様式は見られないが、チェネス様式の建造物がプウク様式の建造物と混在して見られることが確認された。

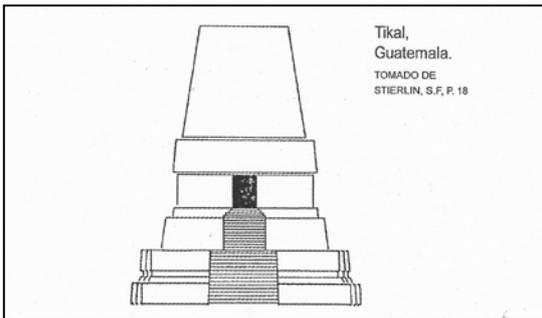


図6 ペテン様式 (Arqueologia Mexicana 44より)

(3) ラモナル遺跡の遺構分布調査

2012年度は、ラモナル遺跡のうち、ラモナルAの簡便な測量を行いながら、同時にラモナル遺跡として登録されている6つの遺構群の分布状況を確認するための踏査を行った。その結果、古典期終末期(後800年~1000年ごろ)における当該地域の文化・社会的状況に関して、これまで考えられてきた解釈とは異なった状況を想定するに至った。

ラモナル遺跡は、1912年にR.E. マーウィンが初めて概測と報告を行っており、便宜的に名付けたA, B, C, D, EおよびXの6つの遺構群から構成されると考えられてきた。ラモナルAは、1995年にベナビエダスらによって一部修復されているが、その他の遺構群については、ほとんど調査が行われていない。今回、6つの遺構群について踏査した結果、以下の点について再考する必要性が生じた。①6つの遺構群には、それぞれ異なった配置や建築

の特徴が見られる。したがって、ひとつにまとまった行政=祭祀センターというより、各々独立した機能をもっていた可能性が高い。②ラモナル遺跡周辺から、より南方に位置するリオ・ベック遺跡にかけて、大小さまざまな遺跡群が分布しており、現在考えられているよりはるかに多くの集団が、ほぼ同時代にいくつものセンターを形成していた可能性が高い。③古典期マヤ社会において、大規模な優越センターが小規模な従属センターを複数支配していたとしても、古典期終末期ごろ、この地域では優越センターの支配とは異なった、独立した諸集団の活動があったことを考えなくてはならない。今後、キチャンカナブ湖底コアやカリアコ海底コア調査等で示された気候変動(大干ばつ)がペテン地域におけるマヤ文明の崩壊と関連していた可能性と併せて、ペテン地方からユカタン北部へと文明の中心が推移していった過程を再考しなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①横山玲子、松本亮三、吉田晃章、カンペチェ州南部地域における遺跡踏査概報(2010年度)、『古代アメリカ』査読有、14号、2011、pp. 77-82。

〔学会発表〕(計3件)

①松本亮三「マヤの世界遺産カラクムル周辺のリオ・ベック遺跡群を巡って—古典期マヤ文明の理解と観光の可能性—」2013年度第1回東海大学文明研究会・観光学部合同研究会、2013年5月25日、東海大学代々木キャンパス。

②松本亮三「文明の衰亡と災害」比較文明学会第30回学術大会&地球システム・倫理学会第8回学術大会講演・シンポジウム「みやこと災害の文明論」、2012年11月17日、京都大学こころの未来研究センター。

③横山玲子「メキシコ・カンペチェ州南部地域における古典期マヤの建築様式の変遷」東海大学文明研究所2011年度第6回研究会、2012年1月19日、東海大学湘南キャンパス。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 玲子 (YOKOYAMA REIKO)  
東海大学・文学部・教授  
研究者番号：50287041

(2) 研究分担者

松本 亮三 (MATSUMOTO RYOZO)  
東海大学・観光学部・教授

研究者番号：20114655  
吉田 晃章 (YOSHIDA TERUAKI)  
東海大学・文学部・講師  
研究者番号：60580842

(3) 連携研究者

研究者番号：